

オンライン型大学説明会と対面型大学説明会のアンケート結果に基づく特徴の比較

山田 恭子 (琉球大学), 田中 光 (山口短期大学), 浦崎 直光 (琉球大学)

本稿では、オンライン型大学説明会と従来の対面型大学説明会をアンケートの回答に基づき比較した。比較の結果、対面型の方が満足度は高いことがわかった。オンライン型は関心度の高まりに寄与していた。また、オンライン型の参加者は、参加前・後ともに志願意欲が高かった。自由記述部分からは、オンライン型においても必要な情報は提供できることや参加の気軽さ、ツールとしての有効性がメリットとして挙げられた。その一方で、詳細がわからない、生の情報が伝わりにくいといったことがデメリットであることが明らかになった。今後はこの結果を踏まえ、より効果的な説明会のやり方を検討していく。

キーワード：入試広報，大学説明会，オンライン，ICT，進路相談

1 はじめに

18 歳人口が減少していく中、大学では学生の量的・質的な確保が急務となっている。そのために多くの大学で対面式の説明会や相談会が行われている。山田ほか (2021) では、大学が主催する対面型の大学説明会は、志願者の獲得に貢献することを明らかにしている。具体的な効果としては、大学説明会に参加することで参加者の志願度が上がったり、高いまま維持されたり、実際の志願に結びついたりしていることが明らかになった。このような取り組みが各大学で継続的に行われている中、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大 (以下、コロナ禍とする) の影響で対面型の大学説明会を実施することが困難となり、多くの説明会が開催中止を余儀なくされたり、オンライン型に切り替えられたりした。本学においても、例年沖縄県外各地で実施していた対面型の説明会をオンライン型に切り替えて実施することとした。説明会を中止とせず、オンライン型に切り替えることとした理由は、2020 年度は大学入学共通テストが初めて実施される等、新入試の初年度であることから、受験生は例年以上に大きな不安を抱えている可能性があり、何らかの形で情報提供を行ったり、受験生からの疑問・質問に答えたりする等、形を変えても説明会の機会を持つことが必要不可欠であると考えたためである。

オンラインを活用した学習については、様々な事例がある。現在もその効果について検証が進められている。Means et al. (2010) がオンライン学習を取り扱った研究についてメタ分析を行ったところ、対面型の指導のみよりも、オンライン型学習のみ、もしくは対面とオンラインの混合型の学習の場合の方がより高い学習効果を示していることがわかった。大学説明会

は、その大学について学習することであると捉えると、オンライン型の大学説明会 (以下、オンライン型説明会とする) を用いても、一定の効果は見込めると考えられる。オンライン型説明会でも一定の効果が見込めるのならば、他の都道府県からの往来に時間的・金銭的なコストが必要な地域や、離島を持つ地域にある大学にとって、それは非常に魅力的なツールといえることができる。また、コロナ禍の終焉が見えない中、感染のリスクを排除できる意味でも、オンライン型説明会は今後もある程度の期間は確実に必要とされ続けるであろう。

そこで本稿では、オンライン型説明会の効果を従来の対面型の大学説明会 (以下、対面型説明会とする) と直接比較することによって検証する。比較を行うことで、オンライン型説明会の特徴を明らかにしていく。その上でオンライン型説明会のメリットとデメリットを示し、その可能性や、より効果的な活用方法を検討していく。比較に際しては、参加者が回答したアンケートを用いる。アンケートでは数的な評価による定量的な分析だけでなく、自由記述についても分析し、質的な側面も比較を行うこととした。

2 オンライン型説明会の開催方法と内容

本学にて 2020 年度に実施したオンライン型説明会の開催方法と内容は以下の通りである。

2.1 開催時期

本学では、2017 年は 8 月に 1 回、2018 年からは 8 月に 2 回、11 月に 1 回の計 3 回、沖縄県外にて出入りが自由な場所を会場として大学説明会を実施してきた (山田ほか, 2021)。これに加えて、10 月もしくは 11 月には、主に沖縄県内の保護者に向けた説明会を

実施してきた（山田ほか，2020）。そこで，オンライン型説明会はこれまで実施してきた様々な説明会の時期に合わせて8月，10月，11月に各1回実施することとした。なお，8月に設定したのは夏休み期間中が参加しやすいため，10月と11月に設定したのは，夏休み以降に琉球大学に興味を持った生徒に参加してもらうためと，3年生の最後の進路決定に役立つと考えたためである。

2.2 対象と参加人数

説明会は沖縄県内・県外の区別をすることなく，全国の高校生，保護者を対象にして実施することとした。居住地域や距離に関係なく実施できることがオンライン型説明会の利点である。

申込件数と当日参加のべ件数は，それぞれ8月が申し込み441件，当日参加293件，10月が申し込み147件，当日参加90件，11月が申し込み147件，当日参加99件であった。なお，8月の開催日は元々夏休み期間の予定であったが，コロナ禍による夏休み短縮等の影響で授業となった高等学校もあったことから，申込件数に対して当日参加件数が大幅に減少したと考えられる。

2.3 内容

オンライン型説明会はweb会議アプリケーションzoomを用いて行った。本学の全7学部それぞれのセッション，学生寮のセッション，本学の学生に相談するセッション，理系への進学を希望する生徒の相談セッションを設けた。スケジュールは，午前中文系3学部，学生寮，学生に相談するセッションを2セッションずつ，理系への進学を希望する生徒の相談セッションを1セッションであった。午後には，理系4学部，学生寮，学生に相談するセッションを2セッションずつ，理系への進学を希望する生徒の相談セッションを1セッション実施した。それぞれのセッションは，1セッション1時間とし，説明，質疑応答を学部教員や担当職員，学生が行い，アドミッションセンター教員と入試課職員がファシリテーターとなって実施した。1セッションの構成は，各学部と学生寮のセッションはPowerPoint等のプレゼンテーションを画面共有しながら行う約20分の説明，約30分のチャットを用いた質疑応答，約10分でクロージングと参加者の移動であった。学生に相談するセッションと理系への進学を希望する生徒の相談セッションはチャットによる質疑応答のみとした。参加者は，参加を希望するセッションを自由に選び，申し込んだ。申し込むセッション

の数に上限は設けなかった。すべてのセッションが終了した後，参加者にアンケートのリンクを記載したメールを送り，webで回答してもらった。対面型で実施した2019年度の説明会では，学部においてはPowerPointにて説明を行い，その後個別相談を受ける形で実施した。学生寮や学生は個別相談のみとした。理系への進学を希望する生徒の相談セッションは2019年には実施されなかった。対面型説明会におけるアンケートは，参加者に受付時に渡し，退室する際に回収した。

なお，1セッションの内容・流れや説明に用いるPowerPoint等のプレゼンテーション資料等はオンライン型説明会と対面型説明会と大きな違いはなかった。また，どちらの説明会も複数の学部等に参加することができるようなスケジュールとなっていた。そのため，両者の大きな相違点は，対面か，オンラインかという開催方法の違いのみと言える。

3 アンケートの結果

3.1 アンケートの概要

2019年度まで実施していた対面型説明会においても，2020年度実施したオンライン型説明会においてもほぼ同じ内容からなるアンケートを用いた。アンケートの内容は以下の通りである。1) 回答者の属性（学年等），2) 説明会についての情報の入手方法，3) 説明会の満足度，4) 説明会に参加したことによる琉球大学への関心度の変化，5) 琉球大学の志願度の変化，6) 対面型説明会とオンライン型説明会の比較（2020年度のみ），7) 感想等の自由記述である。異なる点は，回答方法と，オンライン型説明会にて質問項目を追加したことである（質問6）。この質問項目は，「次の1文を読み，『比べて，』の後に続く言葉・文として最初に思いついたものを教えてください。

『web説明会は従来の対面型の説明会と比べて，・・・』であった。この質問項目を設けることによって，対面型説明会とオンライン型説明会の違いやそれぞれのメリット・デメリットについて参加者がどのように考えているのかを直接示せるよう意図した。

この後は，2019年度に3回実施した対面型説明会のアンケートの結果をまとめたもの（回答者数241名）と2020年度に実施したオンライン型説明会のアンケートの結果をまとめたもの（回答者数177名）を示し，記述していく。比較の対象としたのは，回答者の属性（学年），満足度，関心度の変化，志願度の変化，説明会の比較，感想である。

3.2 学年構成

2019 年度の対面型説明会では、高校 2 年生の参加が最も多く 37%、次いで 3 年生 29%、1 年生 17%の順であった。一方 2020 年度のオンライン型説明会では、高校 3 年生の参加が最も多く、54%を占めていた。次いで 2 年生 23%、1 年生と既卒生が 7%ずつであった。学年構成を比較すると、2020 年度のオンライン型説明会には、2019 年度の対面型説明会と比較して 3 年生の参加者が増加し、2 年生の参加者が減少していることがわかった。2020 年度の 3 年生はコロナ禍により、情報提供の場を得ることが難しく、オンライン型説明会を積極的に活用していたことが示唆される。

3.3 満足度と関心度の変化の比較

3.3.1 満足度

対面型説明会の満足度は、「満足」が 74%、「まあ満足」が 22%と高い満足度を得ていた。回答を「1：不満－5：満足」の 5 段階に換算し、平均値を算出したところ、平均値は 4.70 ($SD = 0.54$) であった。オンライン型説明会の満足度は、「満足」が 67%、「まあ満足」が 24%であった。満足度の平均値は 4.53 ($SD = 0.78$) であった。対面型説明会もオンライン型説明会も満足度が高い水準にあることがわかる。両者の比較を行うために、満足度の値について t 検定を実施したところ、対面型説明会の満足度の値の方がオンライン型説明会の満足度の値よりも高いことが明らかになった ($t(382) = 2.50, p < .05, d = 0.26$)。両者とも高い水準ではあるが、対面型説明会の方がオンライン型説明会よりも高い満足度を得られることが示唆される。なお、オンライン型説明会にて満足度を低く評価した参加者の意見の自由記述には、インターネット回線の問題が複数見られ、内容以外の要因も原因の一つであったことが示唆された。

3.3.2 関心度の変化

「この会に参加して、琉球大学への関心度に変化はありましたか」という質問に対して、対面型説明会では「高まった」が 62%、「やや高まった」が 31%であった。回答を「1：低くなった－5：高まった」の 5 段階に換算し、平均値を算出したところ、平均値は 4.55 ($SD = 0.65$) であった。オンライン型説明会の関心度の変化は、「高まった」が 76%、「やや高まった」が 19%で、平均値は 4.70 ($SD = 0.62$) であった。ともに 9 割を超える回答者が関心の高まりを感じており、平均値も高かった。両者の比較を行うために、関心度の変化の値について t 検定を行ったところ、オン

ライン型説明会の方が対面型説明会よりも高いことが明らかになった ($t(382) = 2.30, p < .05, d = 0.24$)。オンライン型説明会の方が参加者の関心度をより上げることができることが示唆される。

3.4 志願度の変化の比較

志願度については、参加する前の状態と参加した後の状態を尋ね、その差から変化量を算出した。

3.4.1 参加前の志願度の状態

「今回の会に参加する前、あなたの琉球大学への受験意欲はどの程度でしたか」という問いに対して、回答は「1：出願しない」「2：共通テスト次第」「3：どちらかというの出願するつもり」「4：必ず出願する」の 4 段階とした。

対面型説明会前の志願度の平均値は 2.98 ($SD = 0.92$) であった。オンライン型説明会前の志願度の平均値は 3.25 ($SD = 0.81$) であった。両者を比較するために t 検定を行ったところ、オンライン型説明会前の志願度の方が高いことがわかった ($t(382) = 4.59, p < .01, d = 0.45$)。このことからオンライン型説明会の参加者は参加時にすでにある程度の志願を決めた上で参加していることが示唆された。

3.4.2 参加後の志願度の状態と変化量

「今回の会に参加した後、あなたの琉球大学への受験意欲はどうなりましたか」という問いに対して、回答は、参加前の 4 段階に加え、「わからない」を追加した。「わからない」は「2：共通テスト次第」と「1：受験しない」の間にあると想定して設定した段階のため、1.5 で換算した。

対面型説明会後の志願度の平均値は 3.09 ($SD = 0.94$) であった。オンライン型説明会後の志願度の平均値は 3.49 ($SD = 0.81$) であった。両者を比較するために t 検定を行ったところ、オンライン型説明会後の志願度の方が高いことがわかった ($t(382) = 4.42, p < .01, d = 0.45$)。このことから、オンライン型説明会に参加した参加者の志願度がより高まっていることがわかった。

参加者ごとに参加後の志願度から参加前の志願度を減じて変化量を求めた。変化量の平均値は、対面型説明会で 0.12 ($SD = 0.62$)、オンライン型説明会で 0.10 ($SD = 0.55$) であった。 t 検定を行ったところ、両者の間に差はなかった。どちらの説明会も志願度の変化に対しては、同じ程度の効果を持っていたと言える。特にオンライン型説明会の参加者の志願度は高いまま維持されたと言えるだろう。

3.5 オンライン型説明会参加者の記述に基づく分析

ここからは、アンケートの質的な側面について、オンライン型説明会の特徴を示すために、対面型説明会とオンライン型説明会の比較と求めた記述と、オンライン型説明会への意見・感想を分析対象として分析を行う。まず、対面型説明会とオンライン型説明会の比較について分析を行っていく。アンケートでは、対面型説明会とオンライン型説明会を比較させるための質問項目『次の1文を読み、「比べて、」の後に続く言葉・文として最初に思いついたものを教えてください。

「web 説明会は従来の対面型の説明会と比べて、・・・』に対して得られた自由記述について、その回答内容の概要を把握することを目的として KHCoder を用いた分析を行った。これは、コンピュータを用いてテキスト型データの計量的分析を行うためのフリー・ソフトウェアである (樋口, 2004)。このソフトウェアを利用してテキストを計量的に分析することで、比較的客観的に自由記述の内容を要約することができる可能性がある。

まず、アンケート調査で得られた自由記述で記入された文や語句を抽出し計量した。その結果、194 文、総語数 3051 語、異なり語数 499 語 (使用されている語の種類) が抽出された。また KHCoder を使用して、1つの文で各語句がともに使用される頻度を基に

Jaccard 係数を算出し、Jaccard 係数から関連の強い語句を結ぶことで共起ネットワークを作成した (図 1)。共起ネットワーク図の作成では、4 回以上使用された抽出語を使用した。描画する共起関係 (edge) の絞り込みでは、Jaccard 係数を用い、描画数を上位 60 までとした。図 1 の語句を囲む円の大きさは使用頻度を示している。なお、図中の抽出語の距離や線分の長さは視覚的な自動調整の結果であり各語句の関係を表すものではない。

描画された共起ネットワーク図について、各語句を分類するため modularity に基づくサブグラフ検出を行った。これは、各語句を分類した際の語句をつなぐ線分の数に基づいて、最も各カテゴリ内の語句密度が高くなるように分類を行う手法である。図 1 の各語句を囲む図形は、サブグラフ検出の分類に基づいたカテゴリを示している。

図 1 におけるまとまった単語とそれらを含む自由記述を参照して、意見の傾向を推察した。オンライン型説明会実施についての意見の傾向としては、「家」「聞ける」「良い」や、「簡単」「できる」「聞く」がまとまっていることから、参加者はオンライン型大学説明会について、場所を選ばず、簡単に参加できることにメリットを感じていたことがわかった。また、「必要」「行く」「ない」や、「受験生」「遠い」

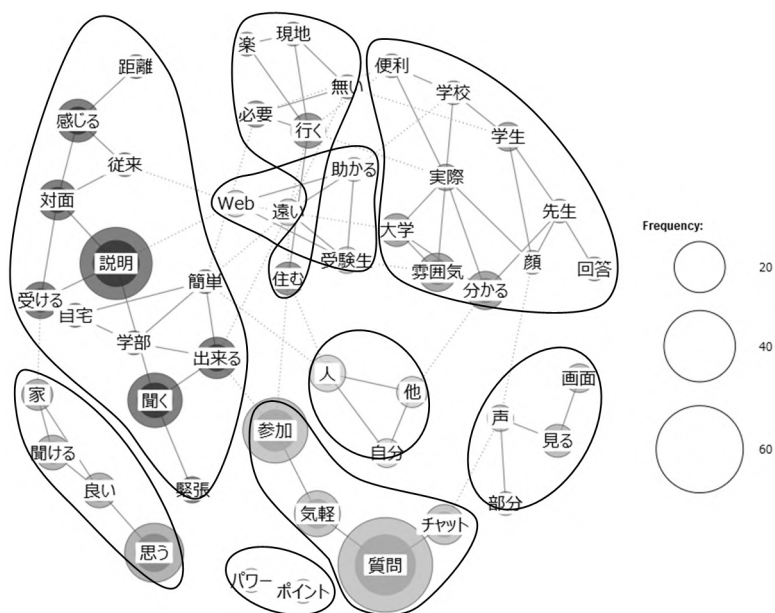


図 1 オンライン型説明会と対面型説明会の比較に関する自由記述を基にした共起ネットワーク図

注 1) 語句を伴う円の大きさは自由記述における出現頻度を表す。

注 2) 図中の語句群を囲む円はサブグラフ検出によるカテゴリ分けを示す。

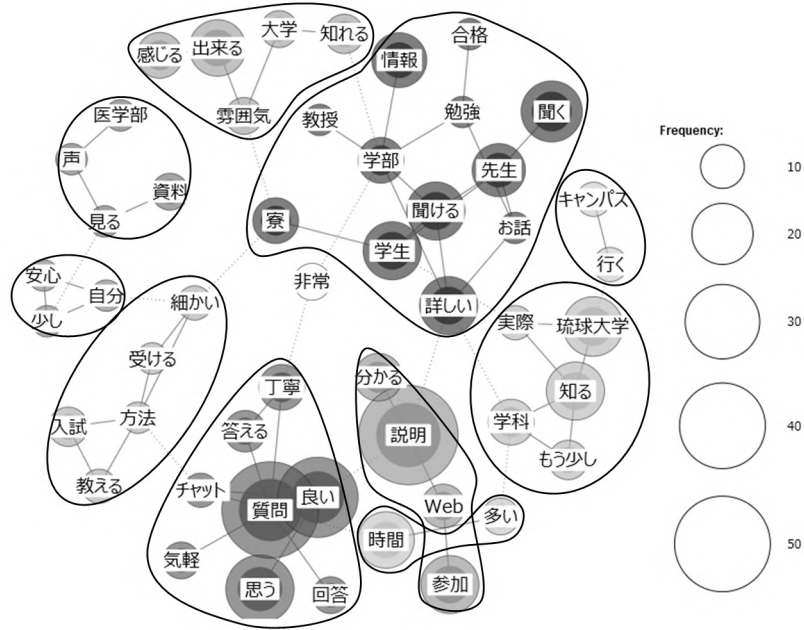


図 2 オンライン型説明会の感想の自由記述を基にした共起ネットワーク図
 注 1) 語句を伴う円の大きさは自由記述における出現頻度を表す。
 注 2) 図中の語句群を囲む円はサブグラフ検出によるカテゴリ分けを示す。

「助かる」といった語句がまとまっていることから、特に琉球大学と離れた距離にある参加希望者にとってメリットがあったと考えられる。さらに、「大学」「雰囲気」「わかる」や「気軽」「質問」「チャット」といった語句がまとまっており、オンライン型説明会でも実際の大学の情報が受け取れていただけでなく、質問も気軽に行いやすかったというメリットがあったことが示唆された。

3.6 意見・感想についての分析

オンライン型説明会への意見・感想について自由記述での回答を求める回答に対しても、KHCoder を用いて語句等の抽出と分析を行った。その結果、271 文、総語数 4404 語、異なり語数 701 語が抽出された。また、1 文で共起した語句を繋げ、共起ネットワーク図を作成した(図 2)。共起ネットワーク図の作成では、5 回以上使用された抽出語を使用した。描画する共起関係(edge)の絞り込みでは、Jaccard 係数を用い、描画数を上位 60 までとした。

描画された共起ネットワーク図について、各語句を分類するため modularity に基づくサブグラフ検出を行った。図 2 の各語句を囲む図形は、サブグラフ検出の分類に基づいたカテゴリを示している。

図 2 におけるまとまった単語とそれらを含む自由記述を参照して、意見の傾向を推察した。「雰囲気」

「大学」「知れる」や「学部」「聞ける」「詳しい」、「入試」「方法」「教える」といった語句が抽出され、それぞれにまとまったことから、意見・感想の傾向として、オンライン型説明会によって、大学の雰囲気や学部の情報、入試方法に関する情報といった基本的な情報を問題なく提供することができていたと推測される。また、「Web」「説明」「わかる」や「チャット」「質問」「良い」といった語句がまとまっていたことからオンライン型説明会の実施は、必要な情報提供にメリットがあり、質問にはチャット機能が効果的であることが示された。一方で、「もう少し」「学科」「知る」といった語句のまとまりが抽出されたことから、詳細な情報については、提供方法に工夫が必要となることが示唆された。

4 課題と今後の展望

本稿では、2020 年度にコロナ禍のために実施したオンライン型説明会と従来の対面型説明会の特徴を比較した。アンケート結果のまとめを行い、オンライン型説明会をメインにその特徴を示し、課題や今後の展望を示していく。

4.1 オンライン型説明会の特徴と課題

まず、満足度については、対面型説明会もオンライン型説明会も高かったが、対面型説明会の方がより高かった。直接対面で話を聞いたり、質疑応答を行った

りすることによって「ライブ感」「体験」「つながり」等の情報提供以外の効果が得られるからであると考えられる。実際に感想の中には「琉球大学を実際に体験したかった」「他の参加者の様子も知りたかった」といったものが散見された。これらに対応するアイデアについては後述していく。

次に、関心度の変化については、どちらの会においても高い効果が得られた。その変化はオンライン型説明会の方が対面型説明会よりも高かった。この理由については、次の志願度の高まりと同様の背景があると考えたため、志願度のまとめと共に考察していく。

志願度は、参加前・後ともに、オンライン型説明会の参加者の方が対面型説明会の参加者よりも高かった。これは参加者の構成が影響していると考えられる。

2020年度に実施したオンライン型説明会は2019年度に実施した対面型説明会と比較して高校3年生の参加割合が高かった。入試や大学についての情報が必要となる中で、コロナ禍のために情報収集の場が少なく、既に志願意欲や関心が高い受験生が機会を見つけて参加し、積極的に情報収集をしたと考えられる。なお、志願度の変化量については、説明会の型による差がなかったことから、どちらの説明会も志願度の高まり自体には同程度影響を及ぼすものと考えられる。また、開催方法が志願度に直接どのように影響するかについては、コロナ禍という大きな要因の影響がなくなっただけから検証することによって、より直接的な効果を示すことができるであろう。

続いて、参加者自身が両者の比較を記述した回答を分析した結果、オンライン型説明会のメリットとしては、場所を選ばずに参加できること、気軽に参加できること、遠距離からも距離を気にせず参加できること、チャット機能により人目を気にせず気軽に質問できること等が挙げられた。また、オンラインであっても大学の情報はきちんと提供できていることも示された。感想、意見の自由記述からも、チャット機能の有効性が示された。これらの結果から、オンライン型説明会は気軽であるにも拘らず、必要な情報の提供・受け取りもできる方法として今後も活用すべきであると結論付けた。その一方で、詳細な情報の提供までは行えていなかったことが明らかになった。さらに、「琉球大学を実際に体験したかった」「他の参加者の様子も知りたかった」といった点も改善すべき点として挙げられる。

以上のことから、オンライン型説明会の特徴は次のようにまとめることができる。参加者にとって、オンライン型説明会は、入試や大学、学部等の必要不可欠

な情報、つまり「モノ」に関しての情報を十分に得ることができる機会と言える。一般的に言われているオンライン型説明会の特徴である「遠隔地からの参加が容易」という特徴も確認できた。それに加えて、双方向のやりとりも気軽に行えるため、参加者の満足度や関心度を高くすることもできた。このことから、オンライン型説明会は今後の入試広報の方法の一つとして有効な手段であると結論づけることができる。その一方で、対面型説明会と比較すると、詳細な情報や体験を伴う「コト」について情報を提供することが困難であったため、その点を今後工夫する必要がある、その工夫によってオンライン型説明会はより効果的な入試広報の一方法となっていくであろう。

4.2 今後の展望

ここからは、対面型説明会とオンライン型説明会の特徴を踏まえ、今後どのように展開していくか、そのための工夫について検討していく。まずは提供する情報の特徴を吟味し、それに合わせた適切な提供方法で説明会を開催することについて検討する。学部の情報提供がメインとなる説明会であればオンライン型説明会をベースに、詳細な情報を提供するならば、可能であれば対面型説明会や、相談をする時間を長く設定した会にする等である。そしてその目的と開催方法をきちんと広報しておくことも重要であろう。それによって、その情報を必要とする受験生が効果的に情報を受け取る可能性が高まり、参加したのに得たい情報が得られなかったといった落胆を防ぐことができる。

また、最低限必要な情報提供ができる一方で詳細な情報までは十分に伝えられていないというオンライン型説明会の特徴がわかったので、意図的に詳細な情報や具体的な情報を盛り込んだ説明や質疑応答を行うことも必要となるであろう。そのために、説明は学科やコースといった学部よりも小さな単位で行うことも効果的であるかもしれない。また、個別相談のような、より詳細なニーズに応じることが可能な場を別途設け、オンライン型説明会の後のフォローを行うことも有効であると考えられる。それによって参加者はより詳細で役立つ情報を得ることができるようになる。

次に、オンライン型説明会と対面型説明会を融合させる方法を検討する。オンライン型説明会の感想には、「他の参加者の様子も知りたかった」といった声があった。今回のオンライン型説明会では、個人情報保護の観点から、説明者のパソコンの画面を共有し、そのプレゼンテーションと説明者と司会者の顔だけを表示していた。そのため、参加者は他の参加者の様子を窺

い知ることにはできない。対面型説明会が可能となったら、その様子をライブ配信することで、ある程度のライブ感を伝えることができる。対面型説明会への参加者には、ライブ配信の了承を得、説明の様子を後方から撮影する等して個人情報の保護に努めることも可能である。こういった方法は、現在大学において実施されているオンラインと対面の融合型の授業や様々なイベントでもすでに用いられている。その他にも、大学を体験するために VR を活用したり、実際に学内を歩く様子をライブ配信したり、学生同士が学生生活について対話する様子を配信する等、オンライン型説明会をより効果的に行うためのアイデアは多くある。

本学のように、遠隔地にある大学にとって、オンラインにて大学説明会を行い、多くの高校生に参加してもらうことは、志願者の獲得のための機会を確保することにもつながる。現在はコロナ禍を経験したことによって、オンラインにて説明会を行うことに対する抵抗もなくなりつつあると言えるだろう。コロナ禍の終焉が見通せない中、オンライン型説明会のメリットを活かしつつ、デメリットを解消したり、違う価値を付加したりすることで、今後もより良い説明会のための工夫を行っていく必要があると考えている。

参考文献

- 樋口耕一 (2004). 「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』 **19**(1), 101–115.
- Means, B., Toyama, Y., Murphy, R., Bakia, M., & Jones, K. (2010). Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies. U. S. Department of Education, Office of Planning, Evaluation, and Development Policy and Program Studies Service.
- 山田恭子・盛山泰秀・鹿内健志・廣瀬等 (2020). 「高校生が進路選択時に相談する相手—アンケート結果に基づいた保護者向け説明会の実施—」『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 154–159.
- 山田恭子・田中光・盛山泰秀・廣瀬等 (2021). 「沖縄県外における志願者獲得に向けた大学説明会の実施とその効果の検証」『大学入試研究ジャーナル』 **31**, 287–292.